

## ■ トークショー ■

### 「西川吉之助・はま子を想う」

語り手 杉本はつ氏

杉田静山氏

聞き手 辻 久孝氏



## 杉田静山さんへの質問

1) ハイド会館で仕事をしていたものですね。

その印象は？

60年前、私がこの学園で仕事をしていた時は、ハイド会館は幼稚園の園舎でした。この写真はハイド会館の建物の裏側です。2階の真ん中の窓の部屋が私の職場でした。ここに英文タイプライターや、和文タイプライター、謄写版などが合っ、私の仕事にしておりました。今は洗面所に改造されたようですが、昔はきれいな床でした。太い梁や柱があって、木の温かみのある部屋でした。右隣が事務室で、その奥が園長室、階下にははま子さんの多年寄宿していた部屋があります。

ハイド会館は今は国の登録有形文化財になっておりますが、若い日の私にはそこまで理解できませんでした。

2) はま子さんのろう者への考え方について、詳しくお話しただけませんか。

(口話教育で、耳が聞こえなくても普通人と同じように話が出来て、生きてゆける)それがはま子さんの生涯の信念だったようでした。ろうあ協会には新年会や運動会などの催しがあれば時折参加しておられました。湖国ローアニュースにも寄稿された事がありました、それ以上ではありませんでした。

3) 昭和32年に亡くなられたというはま子さんは自殺説も流されています。その自殺説について、差し支えありませんでしたら、あなたの見解をおきかせください。

はま子さんは昭和32年7月28日、急性血行性結核で、近江八幡病院内科に入院され、8月2日、午後4時半亡くなられました。他府県では一部自殺の噂が出ているようで残念です。

はま子さんはその前年昭和31年6月、第1回川本口話賞を受賞され、NHKの対談に出演されたり、全国の聾学校、PTAなどから講演の依頼を受けて奔走しておられました。32年6月から



7月にかけて、北海道のあちこちの聾学校で講演、7月18日父上の年忌法要を済ませて帰幡、寝込まれたそうです。秋には九州地区の聾学校で巡回講演の計画が進んでおりました。はま子さんの人生には幾つかの失敗がありましたが、この時には自信を取り戻し、聾教育の啓発に役立つことを願っていたと姉の昌子さんは回想しておられます。

はま子さんは少しでも長生きして活動を続けたかったことでしょう。享年41歳でした。

4) 聾話学校で長く教師をしていらっしゃいましたね。聾話学校の思い出、また、聾教育についてのお考えをおきかせください。

私が聾話学校に在職した昭和30～40年代は、口話教育にも行き詰まった感じがありました。生徒一人ひとりに聴力障害の差があるのですから、口話も、手話も、聴能も、可能性のある方法をみんな併用して、教えたら効果があると思いました。トータル・コミュニケーションの理念です。私たちはグループを組んで、アメリカの聾教育の現場を視察したことがありました。その理念が発展しなかったことは残念でした。

聾教育を退職して20余年になります。今聾学校では特別支援教育問題に取り組んでいるようですが、それと共に聾学校は聾教育の専門の学校であって欲しいと思います。聾学校の校長先生の講話が他の先生の通訳のお世話になるようでは問題です。

## 杉本はつさんへの質問

1) 滋賀県立聾話学校は昭和3年5月16日に創立されましたが、あなたが入学されたのはいつですか。

昭和6年4月8日、滋賀県立聾話学校予科1年に入学しました。中等部4年まで、12年間、聾話学校で学びました。

2) 滋賀県立聾話学校は創立当時から長いこと、手話法での教育はありませんでした。厳しい口話法教育を受けられたと伺っていますが、口話法で教育を受けられて、どう思われましたか。

口話法教育は確かに厳しかったですが、手話はだめだ、とは言われませんでした。先生の中には手話ができる人が3人いました。口話法教育だから手話はだめだ、と誤解を招いたのではないかと、思います。

3) 西川吉之助先生は近江商人をやめて、草津に転居されたということですが、どう思われますか？

西川家は、近江八幡で1、2番を争っているほどの豪商で、北海道のニシン漁を経営していました。しかし、吉之助先生は近江商人に向いてないし、経営を任せるほどの力を持っていなかったそうです。近江商人の道を選ばず、ろう教育への道を選んでしまったことは、西川家の終焉に至ったといえます。本当に悲惨なことだと思います。

4) 西川吉之助先生は、昭和15年に急死されたといわれますが、その前後の様子を、背景も含めてお話しいただけますか。

はま子さんは、父の西川先生の深い愛情と努力によって口話が上達しました。口話によって育てられたはま子さんは、手話派の大阪市立聾啞学校の高橋校長に「手話を教わりたい」と頼みに行ったら、「お父さんにお許しをもらってから来て下さい」と言われたそうです。帰ってきたはま子さんにそのことを打ち明けられたことで、ショックを受けて苦悩されたようです。当時は、本業の漁業を放棄し私財を投げ打ち、その挙句西川家を売却したという悲惨な状況に陥っていました。それ以降、頭に濡れ手のタオルを載せた西川先生が毎

日校務をされていました。

昭和15年6月、学校の行事として天橋立へ修学旅行に行ったとき。いつもあまり同行されたことのない西川先生とはま子さんも同行され、私たちと一緒に楽しく旅行されました。2ヶ月後に、口話教育に限界を感じ苦悩された西川先生は、朝から頭に濡れ手拭を載せている姿で各教室をご覧になりました。私たちが和裁の授業を受けているのもご覧になり、私たちは「どうしたんだろう」と、西川先生の様子をいぶかしく思いました。



翌朝、私は、気分が悪くて4時頃に起きて、蚊帳から出て窓を開けて新しい空気を入れ、寝床に戻ると蚊帳が揺れていました。「もしかしたら地震かな」と思って見上げると電灯が動いておらず、不思議に思いつつ蚊帳から出て見ると数個の石が落ちていました。外を覗いたら、教頭先生が「きこえないお前を呼ぶために石を投げたよ。早く出入口の戸を開けてくれ」と嘆かれ、慌てて戸を開けると、教頭先生が大声で舎の先生たちを呼び、事務室で集まりました。何かあったかな、と意味が分からずいぶかしく思いました。

朝食後、登校しようとする時、保護会長（現在のPTA会長）の娘が「今朝、校長先生が亡くなりました」ときいて、ようやく西川先生の死を知りました。

2日後に、校舎の中庭で校葬がしめやかに執り行われました。校葬の儀の場いっばいに悲哀感が漂っていました。

西川先生を「口話の父」と尊敬しています。西川先生は、毎日手拭を頭に載せて校務をされていた姿が、一番印象に残っています。

## 5) 西川はま子さんとは、いつ出会われましたか。

ろう教育やろう児に関する講演会と生徒の実演が、県内の田舎の普通学校の講堂で行われていました。滋賀県立聾話学校では生徒数が19名と少なかったため、はま子さんが学校の依頼を受けて実演に廻りました。その時に、はま子さんに初めて出会いました。はま子さんは、当時の滋賀県立八幡高等女学校に在学中でした。はま子さんは、相手の先生の唇を見てその言葉を読み取るという読唇術の素晴らしさに参加者が感動し、盛んに拍手を送っていました。

初等部6年の時でした。はま子さんは、県外のろう学校に招かれて講演に行ったり、ろう児を持つ父母会に相談に乗ったりしておられました。それで、寄宿舎は不在がちで、はま子さんの本来の仕事が常に他の職員に回されました。その結果、他の職員は目が回るほど忙しかったそうです。舎の依頼で、初等部5年以上の女生徒たちが、舎生と日直の先生を含めた160人位の食事の準備や後始末、炊事等の手伝いをするはめになったこともありました。

## 6) 聾話学校の寄宿舎ではま子さんと一緒に仕事されていたそうですが、はま子さんはどのような方でしたか。

寄宿舎に就職し、はま子さんと1年間半、同じ部屋で一緒に生活した経験がありました。先生方から「はま子さんは普通人と同じように口話ができます。文章力も立派なものです。社会で活躍しておられます」とよく言われています。はま子さんはあまりにも有名な人なので、私は付き合うことができませんでした。そんな時に、「はま子さん、誰でも自由に会話がどうしてできたのだろうか」と思い切って質問したところ、はま子さんは

固く口を閉じ、何も答えてくれませんでした。

ある日の放課後、舎に帰った時、舎監の先生に「はま子さんを選んで下さい」と言われました。そして、はま子さんがたまたま事務室にいた時に、「聞こえるだろうか」と試して手を叩いたところ、後ろに向いて「何ですか」と言われ、「舎監の先生のお呼びです」と答えました。また、はま子さんが電話機をかけて話すのを見ました。「はま子さんは、やはり難聴者なのでは」と、疑問を感じるようになりました。



## 7) 滋賀県ろうあ協会の創立時、はま子さんはどのようにかわられましたか。

創立総会や行事等に参加して下さったが、ろうあ者の中に溶け込めていなかったように思いました。まるでお客様みたいなものでした。

## 8) 戦後のろう教育については、どう思われますか。

戦後、身体障害者福祉法ができ、ろう学校も義務制になった等、制度や政策が進んでいきましたが、口話法は戦前とあまり変わらないように感じます。ろう教育をより良くするためにも、ろうあ者も健聴者も一緒に議論することが大切ではないか、と思います。

## 訃報

## 杉本はつさん ご逝去

2010年秋の日本聾史学会滋賀大会で、トークショーに出席して下さった杉本はつさんは、2011年4月21日午後9時43分にうっ血性心不全のため入院先の病院で永眠されました。享年88歳。翌日の22日の夜7時からお通夜、23日午後1時より告別式が甲賀斎苑でしめやかに執り行われました。

杉本さんは、滋賀県ろうあ協会創立時以来、永年にわたり、婦人部長、書記長、会長等、役員として聴覚障害者福祉向上に貢献してきました。滋賀県ろうあ協会の母ともいわれ、ろう協会員・手話通訳者等に慕われておりました。また、西川父娘に面会があった最後の生き証人でもある人物でした。ご冥福をお祈り申し上げます。 合掌

(辻 久孝/滋賀県)